

俳句

紫渕吟社、新年句會。

手 毽

つく我れに火爐の母の手毽唄

渭 南

鉢下駄も犬も追ひ行く手毽哉

江 村

振袖の衣紋目出度き手毽かあ

全 白 泉

色町に飾る手毽の二階かな

青 花

水 祝

云ひ難き怨も搗てし水祝

汀 韻

薬賣る老舗の門や水祝

青 花

婦どありし青樓の子や水祝

水 郷

月代の寒げに青し水祝

渭 南

對岸の左義長曇りや丘遠し

默 牛

空濛の底に左義長の人敷哉

水 郷

寺町を吹く大風に左義長哉

全 默 牛

左義長する小石川原や雪模様
野に遠く一帆見ねて左義長哉
ござせし河原の道に暮雪哉

万 歲

万歳や袖する雪の五條橋 黙牛

万歳を宿に呼び込む避寒哉 白泉

万歳に小錢換ぬけり渡し守 水郷

万歳や雪に日當る車寄せ 全

万歳の野道戻るや初夜の月 袖笠の万歳通る雪の町

万歳に磧と逢ふて笑ひけり 汀 韵

万歳の鳥帽子に初日瞳々と 江 村

火 桶

火桶かこむ親子や雪のかより舟 句にうとく火桶の炭をあせり鳴

火桶だいて鼠に物を云ふ夜哉 宿直や火桶を抱いて日誌書く

試合見る師範に小さき火桶哉 渭 南

毀譽の愚を寒き火桶に嘲ひけり

水 涕

水 郷

木の皮の煎じ薬や寒の雨
寒の雨屋根裏の煤流れけり

全
江 村

水 涕や筆耕の孜々默々と

水 郷

鹽田のほとりの芦も枯れにけり
顔見世や世は太平の二百年

全
春 草

水 涕に價争ふ油かあ

水 郷

枯芦や去來けはしき朝の雲
熊突いて戻るアイヌや野の夕日

全
南 若

水 涕や老後を長き賃仕事

水 郷

消ぬ殘る灯や顔見世の衣寒し
見世物の児熊病みけり雨十日

全
默 牛

水 涕の落ちて白衣を汚しけり

水 郷

魯と鈍と乾鮭に是非を論じけり
水脈竹に魚も集はず芦枯るゝ

全
水 郷

紫溟吟社小集

枯芦や島の日和に網を練る

滴 人

熊棲むと風土記に殘る林かな

全
岸 三

顔見世や美相の奴婢庄司

全
水 郷

寒の雨蔭干す炭に油ひく

全
水 郷

機橋の一枚板や芦枯るゝ
雪崩にも熊の遠吠聞けり

全
不 割

遣羽子や片手やさしき袖たぐり
遣羽子の裾そとかやる絆裏かな

全
水 郷

蠟打や遠き汀に芦枯るゝ

全
白 泉

洲に拾ふ汐木を焚くや芦かるゝ

全
水 郷

雜吟

江

村

枯芦や島の日和に網を練る

全
紅 黃

遣羽子や片手やさしき袖たぐり
遣羽子の裾そとかやる絆裏かな

全
水 部

敗けて來る次の間暗じ歌がるた
袖に包む手越重たき禿かな
常盤津は昔師匠や松の内
堀り出しの一幅掛けて冬籠
茶の花や家裏寒き山の烟
草屋根の紙窓白し冬木立
能了へて月に成る殿や梅の影
涯の梅散るや筏に蓑の人

市に踏む鯛の鱗や春寒し
春の雪湯化粧の妓が高木履

默

魚賣の日影追ひ行く枯野哉
鳴飛ぶや検疫を待つ蒸氣船
山番の一一番風呂や霰降る
上る道曲らんとして枇杷の花
茶の花の垣に煙の上りけり

二挺橋に潮垣を乗り切る初日哉

青

花

海越すに足らぬ路銀や鳴く千鳥
楫夫呼べば浪に齧や小夜千鳥
風に鳴る魚見櫓や島千鳥
島は雪の隅晴れ月や鳴千鳥
風を來る馬商人や島千鳥
島渡し瀬戸漕ぎ暮れて千鳥哉
白ひけば濤聲近し小夜千鳥
砂川の杭の淺さや飛ぶ千鳥
夜氣淡き月の江尻や鳴千鳥

忌鬚の結び心や小夜千鳥

關東の大火や初日火の如く
藪に湧く金鏽水や寒雀
急霰に白馬いばゆる廐かな
惡筆の書に親しむや冬籠
瘧腹に濕布を巻くや冬籠
屠牛場の雪にうじみし血汐哉
埋火の灰に字を書く采女哉

水

鄉

滴

人

連判に我れ訪はれけり冬籠

太平の勤儉訓や今朝の春

冬籠古今印譜を深りけり

伊勢は低一源氏枕に小春縁

爐開いて道話閑話に日を消す

鶏を追ふ犬に礫す枯野哉

爐開きや片膝立つる坐り癖

密柑黃に黄ばむ垣越し枯野なる

寒竹を火箸に切りて爐を開く

國分寺の礎残る枯野哉

よべ焼きし梅下の灰や爐を開く

筑波下ろす風に枯れたる冬野哉

昔し男艶書をつざし紙衣かな

早く閉づ枯野の茶屋に灯乞はむ

懷に小判を握る紙衣かな

寒稽古四句

水涕の読み泣くや悔み狀

劍法の眼牙にけり寒二句

水涕の人まめまめし後の事

道具亂雜にて破損せり

河豚を割く厨下の月や霜二更

小手とれば小手に穴ある寒さ哉

辻斬りの武士も交れり河豚汁

今年は三部生大に振ふ

斯人や此意氣や病魔冬ざれむ

寒稽古を龍頭蛇尾に終る人に、

蛤とあらの雀を惜しみけり

等身の佛さざむや冬籠

渭

南